一

磐音は、飯の炊ける匂いで目を覚ました。

表商事を透かし見るにまだ七つ半前だろう。この刻限、飯を炊くのは、磐音の二軒隣に住まいする付け木売りのばば様のおくまか、左官の常次を遠い仕事場に送り出す女房のおしまだろう。

（なんとも腹に堪える、いい匂いだな）

と思いながら、磐音を二度寝をした。

今日は、七の日。宮戸川は休みだ。床を早々に出る要はない。

竹村武左衛門んの危難事件が、南町奉行所の年番肩与力笹塚孫一の手で内々のうちに処理された後、磐音の身辺も江戸ものどかな春日和が続いていた。

二度目に目を覚ましたとき、金兵衛長屋の木戸口に大家の家がした。物が運ばれている気配もあって、どことなくいつもと違った。

障子にあたる日差しの具合から四つ時分だろうか。

磐音は夜具を丸めると、部屋の隅に押しやり、友の位牌の前に置かれていた茶碗を手に、手拭いをぶら下げて、戸を引き開けた。すると溝をはさんだ斜め向かいの部屋に新しい住人が引っ越してきた様子だ。

金兵衛長屋は、木戸口を入って東側に三軒、付け木売りのおくまが住み、その奥が水飴売りの五作とおたね夫婦に四つになる娘のおかや、そして、磐音の三軒だ。西側は、通いの植木職人の徳三とおいち夫婦、次が空き家で、三軒目が青物の棒手振りの亀吉、さらに左官の常次とおしま夫婦に五つになる孝太郎一家と続く七軒屋だ。

東側が三軒なのか、奥に井戸があるせいだ。

その空き家に新しい住人が決まったようだ。

磐音は、木戸口に止められた大八車からにを下ろす男女をちらりと見た。

姉さん被りをした女は若く、どことなく垢抜けていた。

棒縞をだらしなく着た男はどこか遊び人風に見えた。

（金兵衛どのがよう許されたな）

金兵衛が差配する六間堀の長屋はどこも堅気の人間ばかりで、磐音のような浪々の身の者が住むことは許されなかった。常々、金兵衛は、

「うちの長屋で騒ぎは起こさせないよ。堅気の者ばかりだからね」

と胸を張っていた。

井戸端に行くとおたねとおしまが洗濯をしていた。

「お早うござる」

「おや、今朝は、鰻割きは休みかい」

おたねが声を張り上げた。

「鉄五郎親方が決めた鰻の精進日でしてね、のんびりしております」

「なによりなにより」

と答えるおたねとおしまの目は、ちらちらと木戸口に向いていた。

「新しい住人のようですね」

磐音は水を汲み上げながら訊いた。

「どてらの大家め、なにを狂ったか、化粧っ気のある女を引き入れたよ」

お種が吐き捨てた。

「若くて見目麗しいようじゃな」

二人の女にじろりと睨まれた。

「いえいえ、お二人もまだまだ」

磐音が慌てて取ってつけた言葉などそっちのけで、おたねとおしまの目は、新しい住人の動静を窺っていた。

「男と一緒に住む気かねえ」

おしまがおたねに訊く。

「あたしゃ、大家から独り者と聞いたよ。なんでも柳橋付近のお店の通い女中と聞いたが、ありゃあ、仲居か、芸者だねえ」

「どてらの金兵衛も勘が狂ったねえ」

「いやさ、金兵衛も男だ。助平心を出してさ、若い女を住まわせたんじゃないかい」

女たちは好き放題に言い合っていた。

なにしろ独り身の女など絶えて久しく住んだことがない金兵衛長屋だ。

磐音は顔を洗うと井戸端の北側に植えられた椿の下に寄った。

金兵衛が丹精する椿には赤い花が咲いて、井戸端をばあっと明るくしていた。

「孝太郎、邪魔をするんじゃないよ」

おしまが木戸口に向かって怒鳴った。

引越が珍しくて一人息子の孝太郎が見ていたのを母親が呼んだのだ。すると孝太郎と一緒に、おたねの娘のおかやも溝板を踏んで井戸端にやってきた。

「おっ母、荷物から甘い匂いがすらあ」

五つの孝太郎が母親に報告した。

「まあ、この子ったらもおう色気づきやがってさ」

孝太郎が興味を持つのも無理はない。金兵衛長屋で鏡台などを持っているところはどこもない。

磐音は、茶碗の水を新しいものに替えた。

そこへどてらの金兵衛が新しい住人を連れてきた。

「坂崎さんに、おたねさん、おしまさんや、今度な、新しく越してこられたお兼さんだ。よろしくな」

お兼が姉さん被りを取ると先住の三人に腰を折って挨拶した。

「お兼と申します。よろしくお付き合いのほど、お願い申します」

丸ぽっちゃの顔をしたお兼の口に紅がさしてあり、春の日差しに映えていた。

「よろしくな」

磐音は応じた。だが、女たちは黙したままで、かたちばかり頭を下げただけだった。

「姐さん、こいつはどこへ運び込むね」

木戸口から男の声がして、

「今、行きますよ」

とお兼が応じて、そちらに向かった。金兵衛も木戸口に戻りかけ、小さな吐息を洩らした。

「大家さん、日頃の言葉と似合わないねえ」

おしまが早速文句をつけた。

「まあ、そう言うな。うちに最初に来たときは、地味ななりでさ、通いの女中奉公というから、安心していたんだが、怪しげな男がついているとはねえ」

金兵衛の目が磐音に救いを求めるように移された。

「大家どのもなにかと大変だ」

磐音はそう言い残すと長屋に戻った。戻りながら、飯を炊くかどうか迷っていた。だが、飯を炊くとなると菜を考えねばならない。

（よし、一膳飯屋に行こう）

そう肚決めた磐音は、新しい水に替えた茶碗を三柱の位牌の前に置き、手を合わせて瞑目した。

そうだ、今日は神田三崎町まで足を伸ばして、佐々木玲圓道場に顔を出して、玲圓先生に無沙汰の挨拶をなそうと、その日の行動を決めた。

磐音は、豊後関前藩の勤番侍であった頃、直心影流の佐々木道場で猛稽古に励んだ時期があった。だが、勤番を解かれて国表に戻ったところから、磐音の身の回りに異変が生じたのだ。

磐音は、先生への挨拶のことを考えて古びた袴を穿いた。

その腰に坂崎家伝来の備前国の刀鍛冶、包平が鍛えた二尺七寸の豪刀と無銘の脇差しを差せば、外出の仕度はなかった。

すでに引越は終わったらしく、木戸口にあった大八車は消えていた。

その代わりに金兵衛が物思いにふけるように立っていた。金兵衛の家は路地を挟んで長屋の出入りを見通す正面にあった。

「どうなされましたな」

「かみさん連の言うことももっともだよ。あんなひもがついておるとはな」

「親切そうな人ではありませぬか」

「いや、なにかあると合口を懐にしのばせる手合いだよ。あんな男と付き合っている女とは見えなかったがねえ」

金兵衛の嘆きはそこへいった。

「坂崎さん、なんぞあったら頼みますよ。こうなれば、おまえさんだけが頼りだ」

金兵衛は日頃に似合わない弱音を吐いた。

「杞憂ということもあります」

磐音はそう慰めるといったん六間堀川へと向かった。というのも、金兵衛長屋の前を通る路地は西に行くと行き止まりになるからだ。

六間堀川の西側は、旗本と御家人、寺、町家が混在する界隈だ。

磐音はそんな一帯を抜けて竪川に出た。

昼時分の川面に野菜を積んだ物売り舟や酒樽を載せた荷足舟が往来して、活況を呈していた。

磐音はこんな水上の風景を見やりながら、百瀬検校の惣録屋敷の前を通り過ぎ、一ツ目之橋で竪川を越えた。そうなると磐音の頭は、領国東広小路辺りで飯を食する事しか念頭にない。

磐音は回向院の門前で、

麦飯とろろ

と暖簾に染め出された店を見つけた。今まで気が付かなかった店だ。

荷馬が二頭繋がれ、空駕籠も止められているところを見ると、馬方や駕籠かきに評判の店だろう。

磐音は、縄暖簾を潜った。

「いらっしゃい」

豆絞りの鉢巻の小僧が威勢よく見つけて、

「ご新規さん、お一人こちらへ」

壁際の長腰掛けを指した。そこでは馬方たちが丼のとろろめしを啜り込んでいた。

「麦飯とろろを頼もう」

「へえっ、お膳一丁！」

たちまち出てきた折敷には、大丼に麦飯、小擂り鉢に青海苔のかかったとろろ、小鉢に蒟蒻と里芋の煮付け、それに青菜漬けと、なかなかの量のものが並んでいた。

「これは馳走だ」

磐音は独りごちると、とろろを箸でかき回し始めた。

神田三崎町は、神田川に架かる水道橋の南側、武家地が広がる一帯の呼称である。

佐々木玲圓道場は神保小路の一角に旗本屋敷に囲まれてあった。なんでも玲圓の先祖が幕臣で、その縁でこの地を下げ渡されたとか。

麦飯とろろに満ち足りた思いをしながら道場の玄関に立つと、中から袋竹刀で打ち合う音が響いてきた。

だが、昼下がりのこと、朝の間や夕刻の賑やかさはない。

「磐音ではないか」

住み込みの兄弟子の一人、本多鐘四郎がにこにこと笑っていた。

師範の一人だ。技量もさることながら、人柄が玲圓に高く買われて、いわば佐々木道場の番頭といえた。

「無沙汰をしておりますれば、先生にご挨拶をと思い参じました」

「先生は来客中でな、しばらく待つことになるぞ」

「構いませぬ」

「ならば待つ間に一汗かかぬか」

「稽古にございますか。先生のお許しも受けずにようございましょう」

「なんの遠慮はいらぬ。先生はそなたの身を案じておられてな、時に顔を出して稽古をすればよいものをと、いつも仰っておられるわ。上がれ上がれ」

同じ釜の飯を食べた兄弟子の磊落な言葉に磐音は道場に通った。そこでは十数人の門弟たちが打ち込み稽古に汗を流していた。

磐音が見たところ、半数ほどが見知らぬ顔だ。

「相手をいたそうか」

鐘四郎が笑いかけた。

「先生にお断りするまで一人稽古をしとうございます」

「好きにせよ」

磐音の気性を知る鐘四郎がそう言うと、

「後でな、皆を紹介いたそう」

と言ってくれた。

磐音は、手にしていた包平と脇差を抜き、定寸の木刀を借り受けた。

道場の端に正座した磐音はしばし瞑想に入った。

直心影流は、高槻藩家臣山田平左衛門光徳が流祖の剣技だ。

一風斎と号した平左衛門は、高橋弾左衛門が開祖の直心正統流を習い、一時、師に疎まれ、柳生門に転じていた。だが、後に高橋門に戻り、神影流の的伝七代を継いで、流派を興した。

平左衛門は創意の人で、皮具、頬当て、竹刀などを工夫した。さらにその子、長沼四郎ざえもん則郷が面、籠手を完成させて、防具を使っての実戦様式の稽古ができるようになった。

直心影流は、平左衛門の直弟子、四郎左衛門とは兄弟弟子だ。

磐音が玲圓門下に入門したすぐの頃、二代目の長沼四郎左衛門がなくなり、磐音は玲圓の供で弔いに行った思い出があった。

磐音は両眼を見開くとゆっくりと立ち上がった。

両足を開き、腰を落として、左手に保持した木刀を正眼に置くと緩やかに使い始めた。

遅速なれば遅、硬軟なれば軟、強弱なれば弱を会得することこそ剣の奥義、至難の領域であった。

春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫の如き磐音の居眠り剣法も、遅速硬軟強弱の律動と間があってこそのものであった。

磐音は、呼吸を調えつつ、舞いでも舞うように緩やかに木刀を振るい、移動した。新弟子たちの中には、奇異の目で磐音の動きを見つめる者もいた。

「御免」

「頼もう」

稽古に没頭する磐音の頭にも、玄関先で張り上げられる声が伝わってきた。だが、磐音は稽古を続けた。

ふいに傍若無人な嵐が佐々木道場に吹き荒れた。

二人の男が、応対に出た若い弟子の腕を左右から抱え込んで道場に現れ、

「そうれ」

と床に投げ捨てた。

「な、なにをなさる」

鐘四郎が倒れた弟子のところに走り寄り、暴漢の前に立ち塞がった。

「応対の仕方も知らぬで教えたまでだ」

一人が言う背後から派手な歌舞伎模様の羽織を着た侍が入ってきた。さらに三人の仲間が道場の入り口の左右に立った。

「そなたらは何者でござるな」

「佐々木玲圓先生に一手ご教授願おうと参った者じゃ」

最初に押し入ってきた剣客の一人が言い放った。

稽古を中断した磐音の耳に、

「道場破りか」

「今、評判の赤鞘組だぞ」

と騒ぐ声が伝わってきた。

「当道場では、礼儀知らずの者どもの来場は御免被っておる。出なおしてこられよ」

鐘四郎の凛とした声が響いた。

「挨拶なき者とは立ち会わぬとな。ならば、名乗ろうか。あれにおられるが天下無双の神道無念流達人、直参旗本、曽我部下総守俊道どのじゃ。それがしは一の配下、亀山内記」

「騒がしき御仁かな。神田川の水で頭を冷やされよ」

亀山内記がふいに鐘四郎に走り寄ると抜き打ちをかけた。だが、鐘四郎は間合いを外して飛び下がり、

「これ以上の無法をなさると許しませぬぞ」

と叫んで、てにしていた袋竹刀を構えた。

相手は真剣だ。

両者が睨み合って動こうとしたとき、見所に佐々木玲圓と、今一人の恰好のよい武家が姿を見せて座った。

鐘四郎が来客中と言ったが、その客人だろう。

磐音は遠く師を拝すると床に座して、平伏した。

「師範の申す通り、わが道場では無作法者に剣を教えする習わしはござらぬ。退去なされよ」

静かに諭すような声だった。

「弟子も弟子なら師匠も師匠。だれもが及び腰だぜ」

内記が抜身を下げて、道場の真ん中へと進んだ。すうると仲間と曽我部俊道もずがずが押し入ってきた。

磐音はその餓狼のような赤鞘組の一人の手に包平が下げられているのを見た。

「これはなかなかの長剣ではないか。まさか中は鯖鰯ということはあるまいな」

と言ったその男が抜こうとした。

「あいや、お待ち下さい。その刀、それがしのものにござれば、元の場所にお返しください」

磐音の声は緊張した道場の中にのどかに響いた。

包平を手にしていた男が、

「おのれの差し料だと。なかなかの逸品と見た。それがしが貰っておこう。それとも腕ずくで取り戻すか」

「それがし、佐々木道場の昔の弟子、今はこちらと関わりなき身にございますれば、当道場を騒がすのは、心苦しゅうございます」

「ほう、外なら立ち合うてか」

男は包平を肩に担いで曽我部を見た。

「外とは面倒な、ここで構わぬ」

曽我部が低い声で洩らした。

磐音は師を振り見た。

「磐音、気の毒をさせるな」

と笑みを浮かべた顔で磐音を見た。

「お許しいただけますか」

「世の中は言うても分からぬ馬鹿者もおる。嘆かわしいことよ」

「おのれ」

と吐き捨てた内記が見所の佐々木玲圓に走り寄ろうとする気配を見せた。

「お相手仕る」

磐音は内記に言いかけるとゆっくりと立ち上がった。

「よし、素浪人、吠え面かくな」

磐音をそう見たようだ。

包平を肩に担いだ仲間は道場の壁際にさがった。

「亀山内記様、袋竹刀にございますか」

「面、籠手をつけてのお遊びが直心影流の売り物のようだが、畳水練など真の武士はせぬものよ」

「ならば、木刀にてお願いいたします」

磐音はてにしていた定寸の木刀を提げて、まず見所に、そして、弟子に頭を下げた。

今や佐々木道場の弟子たちは、左右の壁際に下がっていた。そして、磐音を知る門弟たちが、新しい門弟に磐音のことを素早く耳打ちしていた。

「居眠り剣法とはどのような剣にございますか」

「まあ、見れば分かるわ」

亀山内記は仲間の一人から悠然と木刀を受け取った。

赤樫の太い木刀で、よほどの腕力の者でなければ振り回そうにない代物だ。むろん、まともに打ち合えば、並の木刀など吹っ飛びそうな打撃を秘めていた。

「お手柔らかに」

「赤鞘組の剣技にて柔らかさなど無用」

内記が吐き捨てた。

磐音と内記の背丈はほぼ一緒、六尺余だった。だが、胸板の厚さと腕回りが尋常ではない。

磐音は正眼にとった。

内記は鋼鉄とも思える光沢の木刀を悠然と上段に差し上げた。

まあいは一間半。

一瞬、時が止まった。

だが、次の瞬間、内記は磐音に殺到すると、上段の木刀を磐音の脳天目掛けて打ち下ろしてきた。

凄まじい唸りとともに木刀が不動の磐音の頭上に落ちてきた。

磐音の正眼の木刀が、落ちてくる赤樫の木刀に吸い込まれるように動いた。

「あっ」

という悲鳴が上った。

内記は、胸の内でにんまり笑うと、

（仕留めた）

と悦に入った。

が、次の瞬間、不思議な手応えに驚かされた。一見怯えたように擦り合わされた木刀に、内記の棍棒のような木刀のちからが吸い取られて、真綿にくるまれて弾かれたのだ。

（な、なんとしたことか）

態勢を変えつつ内記は、はづかれた木刀を強引に八双に引き付けた。

磐音は木刀を弾いた空間を支点に、舞でも舞うようにゆるやかに反転した。

内記は、態勢を入れ替えつつある相手の肩口に、木刀を叩きつけた。

（今度は届いたぞ）

喝采を叫ぼうとした眼前で再び予期せぬことが起こった。

八双に打ち下ろす木刀が、どこをどうか寄ってきたか、相手の木刀に擦り合わされた。

音もせず、打撃もなく、ただ内記の木刀の打撃を吸い消されていた。

「こなくそ！」

内記は、腹に力を溜める得意に連鎖技に出た。

磐音の眉間、肩口を、脇腹を、小手を、重い木刀が襲った。

だが、いわねの木刀がまるで尻尾をゆるやかに動かして蠅を追い払う年寄りのねこの動きのように、来襲する攻撃のことごとくを跳ね飛ばしていた。

顔面を朱に染めた内記は、一連の攻撃が無益に終わったとき、自ら間合いを外して逃れた。

今や内記の肩は大きく上下し、息は荒く弾んでいた。

「おのれ、亀山内記を愚弄するか」

内記は後退すると間合いを十分に開けた。

二人は六間余の空間を挟んで向かい合っていた。

片や動、片や静。

全く対照的な二人だった。

磐音は無風の河岸に立つ柳のようにひっそりつ佇んでいる。

地擦りに流された木刀を手に、右足をわずかに前に出してすっくと立っていた。

「し、死ねっ！」

内記は叫ぶと赤樫の木刀を天に突き上げるように構えて走り出した。

見る見る間合いが縮まった。

「おりゃあ！」

怒号が佐々木道場に木霊し、内記が虚空に飛び上がった。

木刀が背まで振り上げられ、反動を利して振り下ろされた。

磐音の木刀が動いたのはそのときだ。

微風が舞い上がり、頭上からの暴風に抗した。

かーん

という乾いた音が響いたのは、次の瞬間だ。

微風が暴風を裂いて、赤樫の木刀を二つにへし折り、切っ先を曽我部下総守俊道の足元に飛ばしていた。

さらに磐音の木刀は、折れた木刀を手に呆然と床に着地した内記の脇腹を叩くと、横手に吹き飛ばしていた。

くるり

と磐音のからだと木刀の先端が曽我部俊道に向けられると、

「次はどなたですか」

とのどかな声が問うた。

「おのれ」

曽我部は吐き捨てると、くるりと背を向けた。

「お仲間をお連れなさい。それに、それがしの刀を戻し願います」

磐音の家がさらに響き、道場になんともいいようのないどよめきが起こった。